

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 立山町立立山中央小学校・教諭・堀井 万里
- 2 研修期間 令和元年 9 月 15 日（日）～9 月 23 日（月）
- 3 調査研究課題 ドイツにおけるデュアルシステム教育の在り方や他国の社会情勢や芸術、文化等の調査研究
- 4 研修機関等
ドイツ：在デュッセルドルフ日本国総領事館
ザンクト・ペーター小学校
アルブレヒト・デューラー専門学校
デュモン・リンデマン共同基幹学校
ブリュッセル：EU 本部
フランス：オルセー美術館、ルーブル美術館

5 研修の概要

(1) デュッセルドルフ

①在デュッセルドルフ日本総領事館

ドイツの教育の大きな特徴は、学校に通いながら職業訓練をすることができるデュアルシステムを取り入れていることである。職業訓練の道に進むか、進学するかの進路決定は基本的には 10 歳で行う。1980 年代は決定した進路を変更することは、あまりなかった。しかし、近頃は途中で進路変更をすることができるシステムもある。職業訓練の進路を選ぶ子供の減少傾向が見られること、手に職をもった職人の減少が課題である。高校、大学へ進学する割合は 56%である。また、今年からデジタル教育を強く進めており、ギムナジウム（中等教育）では、子供全員にタブレットが配付されている。10 歳で人生に関わる進路決定を行うということは日本では考えられない。社会に出たときの姿を意識できるような声かけを子供たちにしたいと感じた。デュッセルドルフでは、移民を受け入れたため人口が増えており、少子化の問題はない。移民の内、34%が 18 歳以下である。しかし、ドイツ語を話す・書くことができない子供たちに対する教育が課題となっている。

総領事館は、親日家を増やす目的でドイツの学校へ日本教育の促進を行っている。日本についてのイベントを行うと 800 人程来場するぐらい人気である。

②ザンクト・ペーター小学校

フリードリヒシュタットにある小学校である。子供の数は約 200 名で教員は約 15 名である。基本的な学習に加え、文化、芸術、宗教の学習がある。デジタル教育も大切にしており、プログラミング教育も行っている。いくつかの授業を参観したが、一斉授業をしている学級はなく、個々がそれぞれの課題をもって学習していた。自主的に学習に取り組もうとする態度が身に付く一方、一人一人の学習内容に差があるように感じられた。個別の学習と一斉指導、それぞれのよさがあることを実感した。学習の目的によって学習形態の工夫に生かしたいと感じた。

移民の子供がいるため、希望者には個別のドイツ語教育を週 10 時間行っている。週 10 時間とは、手厚い支援である。移民に対する期待が感じられた。また、宗教によって基本的な道徳観が異なるため、「モラル」という学習で道徳観を教えている。ザンクト・ペーター小学校はカトリックの学校であるため、異宗教の保護者には入学前に何度も来校してもらい話をしている。子供同士の目立ったトラブルは、ほとんどない。基本的な学習は午前中で終わり、午後は希望性の学童保育であることに驚いた。ダンス等の趣味の時間になるようだ。

在学中に職業訓練か進学校かの進路を決定しないといけないが、学校でキャリア教育は特に行っていない。進路決定は親と子供の責任と考えている。

③アルブレヒト・デューラー専門学校

職業学校である。生徒の数は約4,700名で教員の数は約140名である。①職業訓練前の準備コース②職業訓練③職業訓練後の専門技術の習得という3段階の学習過程を採用している。ここでは、デュアルシステムについて詳しく学ぶことができた。生徒数の4,700名のうち、ほとんどの生徒が週に3、4日は訓練先(事業所)で実技を学び、残りの1、2日は学校で理論を学ぶ。訓練先は生徒自身で決定しないといけないが、難しい場合には手工業会議所の助けを得て見付けることができる。公立学校であるので、授業料は必要なく、訓練先から賃金が支払われる。日本との大きな違いに驚いたが、小学校の頃から将来の姿を意識させ、自分の行動に責任をもたせるよさがあると感じた。また、校内にはたくさんの教室があり、本格的な機械や道具が揃っていることが印象的であった。

④デュモン・リンデマン共同基幹学校

生徒の数は約530名で生徒の80%が移民家庭出身である。教員の数は約30名である。ここでは8~10年生(13歳~15歳)に職業選択ブックを用いた進路指導やキャリア教育を行っている。8年生のときに自分の分析(職業に関する知能検査等)をし、それを基に様々な職業について調査する。9~10年生で、年に2回2週間の事業所での実習を行う。ここでも、事業所は生徒自身で見付けなければならない。自分の特性を考慮しながら、様々な職業を体験して職業を選択できるシステムが、まさにキャリア教育であると感じた。

⑤デュッセルドルフ手工業会議所、ネスマンバスルーム&ヒーティング有限会社

手工業会議所には、59,152の事業所が登録している。主に三つの役割がある。①訓練生を事業主に斡旋する②マイスターの称号を与える③経営上の指導を行うの三つである。69%の事業所が1~4名の小規模であり、あらゆる職種で後継者不足の問題がある。ネスマン社は大規模な事業所にあたり、マイスターが2人いる。ここでの研修期間は、3年6か月。5名の学生には、1人につき1人の職人さんが付いて実際の現場で研修を行う。1対1で研修ができることは、学生にとって充実した研修であると感じた。移民の学生もいるが、日常生活でのドイツ語での会話は問題なくできるが、専門用語等で苦勞する場面もある。職人を目指す学生が減少傾向であるということは日本と同じ課題である。

(3) 市街地視察

町並みや歴史的な建物を見てまわった。パリでは地震がないため、隣の家の壁同士が密着していることを経済同友会の方から教わった。ケルン大聖堂の迫力は忘れることはないだろう。また、美術館では、ガイドの説明を聞きながらミレーやマネ、モネ等たくさんの絵画や彫刻を鑑賞した。印象派の作品の描かれ方が時代によって随分違うことが分かった。歴史的背景を知ることで、美しさだけではなく、作品としての魅力を感じることができた。外国の文化や町並みの違いを子供たちに伝え、異文化に親しませたいと感じた。

(4) 教育事情視察を終えて

1週間、経済同友会の方々や異校種の先生方と行動を共にさせていただいた。異校種の先生方とは、子供の年齢の違いによる、教育上の課題を話し合う中で、私自身の中学校、高等学校教育への理解が深まった。小学生に身に付けるべき資質についても考えさせられた。経済同友会の方々からは、話や行動を通して人への思いやりの心をもつことで、人間性が高まるということを学んだ。また、人と関わるときに大切なのは、「他者理解をしようとする事」だという話が今の私の人との関わり方に変化を与えている。今回の研修で感じたり考えたりしたことで、確実に視野が広まった。子供に指導する立場の人間として、少しでも人間性を高め続ける努力をしていきたい。